

# グローバル・リテラシーとは何か： マイノリティー言語と 社会の視点から考える



"What is global literacy: A look from the viewpoint of minority languages and societies"

世界のグローバル化によって、国境を越えた経済活動をはじめ、国際語英語の普及など、均質化が進む一方で、個々の言語文化の独自性がますます意識されるようになってきました。多様性がまさにグローバル化のキーワードになっている現代社会において、社会を支えるために必要なグローバル・リテラシーをどのように考えればよいのでしょうか。本講演会では、消滅に瀕している言語や、マイノリティーと呼ばれるコミュニティー研究の第一線で活躍している研究者から最近の研究の動向や研究意義を伺います。講演内容を通して、グローバル時代、とりわけ日本の若者に求められるグローバル・リテラシーや、21 世紀の外語大の役割と使命についていっしょに考えることができましたらと願っています。

## プログラム (第二弾)

日時：2017 年 6 月 23 日 (金) 14:50-16:20

場所：神田外語大学 7 号館クリスタルホール

講演者：

**パトリック・ハインリッヒ氏**  
Heinrich, Patrick

「後期近代日本における琉球諸語」  
"The Ryukyuan Languages in Late Modern Japan"

**マーク・ウィンチェスター氏**  
Winchester, Mark

「母語への意志：アイヌ語復興と言語的モダニティ」  
"The Will to One's Native Language: Ainu Language Revitalization and Linguistic Modernity"

司会：サウクエン・ファン 先生  
(本学国際コミュニケーション学科教授・当研究所所長)

使用言語：英語または日本語

## 後期近代日本における琉球諸語

講演者：パトリック・ハインリッヒ氏 Heinrich, Patrick

「近代」は特別な時代というより、特定の時点で世界の特定の地域において大きな影響を与えた「態度」であるといえる。その態度の中心には、世界を混乱していると捉えたことによって、逆にこれを整理しようとする欲望があった。「近代的な秩序」を求める人々によって、「普遍性」、「単一性」、「単調性」と「透明性」が高く評価されたため、言語や言語生態は、これらのイデオロギーによって管理されることとなった。「国語」、「国民」、「国家」は一致しなければならないものであり、逆に、多言語主義は「無秩序」とみなされた。その結果として、近代日本のすべての先住言語が消滅の危険に瀕している(アイヌ語、琉球諸語、八丈島語、小笠原クレオール英語)。これらの少数言語は現代まで生き残ってはいるが、言語活力の視点から見ると、劇的な言語シフトと言語喪失を経験した。しかし、現代日本が後期近代に歩み始めるにつれて、これらの言語は新しい使用者によって再発見され、新しい場面にも使われ始める。なぜなら、後期近代性は「普遍性」、「単一性」、「単調性」と「透明性」にあまり気を取られず、むしろその反対の態度、例えば「複数性」、「多様性」、「偶然性」や「アンビバレンス」も受け入れることができるためである。本発表では、このような価値観のシフトを琉球諸語を例として説明する。危機言語の問題を解決しようとするならば、他の現代環境に要るおける社会的な不平等を是正する必要がある。そのような理由から、危機言語の問題は「良い問題」であると思う。この原則は、日本の言語マイノリティだけでなく、近代環境に組み込まれる世界中のすべての少数言語にも該当することを示したい。



イタリア、ヴェネツィアの Ca' Foscari University (Ca' Foscari University) の准教授  
専門は、社会言語学、言語学史、言語教育

## 母語への意志：アイヌ語復興と言語的モダニティ

講演者：マーク・ウィンチェスター氏 Winchester, Mark

アイヌ語専門の言語学者である奥田統己氏は、2001 年に発表された重要な論考では、アイヌの話手たちの母語(取得状況問わず)への希望や「思い」というものを、アイヌ語復興運動のもっとも重要な側面の一つとして提示した。奥田氏が論考で特に懸念していたのは、アイヌ文化復興政策の場において、アイヌ語が「民族としてのアイデンティティの中核をなす」ものとして謳われるようになったにもかかわらず、「現代を生きるアイヌの人は、自らの『民族としての証』を得るために今の自分の生活のかなりの部分を捨てざるを得なくなるかもしれない」ということだった。研究者や政策立案者は、個人的利害関係に避け難く彩られていることを明示的に自覚し、「先祖と自分とのあいだに何らかのつながりを見いだすなどして、アイヌとしての自己を位置づけようとしている人」によるアイヌ語への「思い」に応えなければならない、と奥田は論じたのだ。これは何より「アイヌの人々の文化的営みは近代に入っても大きな多様性を持って存在し続けた」という理由からなる主張であった。



神田外語大学日本研究所専任講師  
専門はアイヌの近現代思想史

このアイヌ語への「思い」、あるいは母語への意志とでも言うべきものは、私の専門である近現代のアイヌの文学や思想表現においても、広く見て取れることができる。口承文学の日本語訳、一つの文学作品の中で交差するアイヌ語と日本語、口承文学に奮い立たせた日本語による新たな創作、形態は様々だ。それらもまた、まさに奥田が言うような近代に入ってから大きな多様性を持って存在し続けたアイヌの文化的な営みにほかならない。今回の講演会では、このような作品をいくつか検討し、母語への意志というのが近現代のアイヌの文学や思想表現を通して自己実現、またはその中で言語における近代性をどのように確立させたかを見ていきたい。アイヌ語復興の現状から導き出された母語への意志という観点から、近現代のアイヌによる様々な文学や思想表現を通して検討した後では、逆にアイヌ語復興へと再びヒントになるような営みはないのか。これも模索してみたい。